

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02314

研究課題名（和文）英彦山修験道石造美術における廃仏毀釈の影響-豪潮律師作宝篋印塔を中心に

研究課題名（英文）A Reconstruction Study of Hikosan Mountain Religion Art Influenced by the Haibutsukishaku Movement: Gocho; Stone Pagodas

研究代表者

知足 美加子 (Tomotari, Mikako)

九州大学・芸術工学研究院・教授

研究者番号：40284583

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治期の仏教排斥運動（廃仏毀釈）の文化財破壊を免れるため、英彦山修験者が改刻を行ったとされる豪潮作宝篋印塔(1817年)の分析と復原を行った。その結果、この塔を燈籠として改刻する際、仏教の「種子」や「蓮華」の表象を否定しながらも、五大思想などの仏教思想を暗示させる造形的工夫を施していたことが分かった。これは仏教教義の否定ではなく、神道に対する仏教の優位性のみを否定するために行ったと考えられる。失われた英彦山宝篋印塔塔身の種子部分の配置について、英彦山における北岳への信仰等を根拠として、背面に北方の阿シユク如来(アク)の種子をおく「南面北座」の配置であったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、明治期の廃仏毀釈によって禁止・破壊された修験道文化が、自然信仰および神仏習合（異なる信仰の共存）という日本文化の重要な基底の一部をなしてきたと仮定し、文化財復原を通じて修験道文化の輪郭を明らかにするものである。特に弾圧が厳しかった英彦山修験道について、3Dデータによる計測、AR(仮想現実)等のデジタル技術と、伝統的彫刻技術を組み合わせて復原を行うところに新規性がある。《宝篋印塔》《彦山三所権現御正体》《不動明王立像》について復原を行い、英彦山神宮のご神体として祀られている。途絶えていた神仏習合の護摩焚きを復活させ、再興の礎となった。また九州北部豪雨災害の際、文化による復興に寄与した。

研究成果の概要（英文）：This study investigates mountaineering asceticism culture from the cultural assets reconstruction. The mountaineering asceticism was prohibited by a Buddhism rejection campaign (Haibutsukishaku). The cultural assets of the mountaineering asceticism were destroyed. The Hikosan mountaineering ascetic engraved the pagoda (1817) to a garden lantern again to avoid destruction. As a result of having analyzed the camouflage, they engraved the representation of "Sanskrit characters" and "the lotus flower" of the Buddhism. But this was not negation of the Buddhism doctrine, and cultural grounds that I denied only superiority of the Buddhism for the State Shintoism became clear. About the Sanskrit characters of the lost pagoda, it was supposed that northern Buddha was placed in the back based on direction faith.

研究分野：彫刻 修験道美術

キーワード：修験道 彫刻 宝篋印塔 文化財復原 自然信仰 神仏習合 芸術 デジタル技術

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

知足美加子「英彦山修験道石造美術における廃仏毀釈の影響 -豪潮律師作宝篋印塔を中心に」報告

1. 研究開始当初の背景

英彦山(福岡県)は、羽黒山(山形県)、熊野大峰山(奈良県)とともに日本三大修験山のひとつながら、明治維新の神仏分離令と廃仏毀釈、修験道禁止令の影響を強く受け、ほぼ伝統が途絶えている。口伝伝承を旨とする修験道文化において文献資料は乏しい。

英彦山における文化財破壊は、慶応4年(明治元年、1868)香春寺社に神仏分離の布達があったことに端を発する。神仏分離当時「神兵」(急進派の下級山伏と山外民)は、寺院・堂塔・仏像・仏具を悉く破壊しようとした。明治6年、禰宜となった山名豊樹は神職ながらも破壊を好まず、仏像類を隠して守ったという。その後禰宜となった三井八郎は廃仏毀釈を推し進め、神兵数十名と共に仏像類を破壊し、あるいは火に投じた。本稿で取り上げる修験道美術はこの時期に隠され、あるいは改変されたものである。

2. 研究の目的

本研究は英彦山修験道美術に注目し、廃仏毀釈時の文化財破壊行為と、それを回避するために加えられた造形的改変部分を調査する。文化財の復原を通して、忌避または受容された意匠と、その表象の分析を行う。英彦山における明治期の「修験宗廃止の太政官布告」の受容、および修験道思想と仏教、神道等の宗教的表象との関係を問う。さらに、明治期に否定された英彦山修験道美術表象の内容を明らかにし、容認と否定の境界を精査し、修験道文化の輪郭を浮かび上がらせることを目的とする。

3. 研究の方法

研究対象として、英彦山修験者が文化財改変に関わったと考えられる英彦山内の石造《宝篋印塔》、銅製《彦山三所権現御正体》、木彫《不動明王立像》を取り上げる。研究方法は、まず各対象を三次元計測による3D(three-dimensional)データ化や拓本によって形状分析を行う。次に彫刻家である筆者の伝統的彫刻技術と、レーザー加工、三次元印刷などのデジタル技術を組み合わせ、文化財復原を試みる。さらに3Dデータをもとに、AR(拡張現実)技術によって、現地に訪れなくとも文化財復原状況を観察できる鑑賞方法を試作する。制作者としての観察や、プロセスの考察・実践を通して新たな知見を得る。

4. 研究成果

(1) 豪潮作宝篋印塔

明治期に燈籠として塔身、基壇、反花を改刻された豪潮作の宝篋印塔(1817年)を取り上げる。

この改刻では、「種子」と「蓮華」の表象が積極的に否定されている。豪潮が制作した他の宝篋印塔と比較し、請花に8つの如意宝珠があることを新たに見出した。

次に火袋改変の宗教的根拠の調査を行った。英彦山の塔身は、金剛界五仏種子を削り、火袋として「四角、円、三角、半月」を造形している。実際の方角として、円形(日光)は東方、半月形(月光)は西方に位置しており、燈籠の体を成している。しかし背面に三角形を配している燈籠は稀である。英彦山修験者は、この塔を単なる燈籠ではなく「五大思想を暗示させる仏教遺物」とするための造形的工夫を施したと推測される。五大として、正面から左回りに地(四角)、水(円)、火(三角)、風(半月)、空(団:中心の宝珠)と配置し、この塔が仏教に帰依すること示す表現を、造形の中に巧みに取り入れている。さらに英彦山山伏の特別な意図が反映されている点は、「猶是塔堅固不滅、一切如來神力」等の経文要約部分を残したことである。つまり英彦山山伏は、「仏教の教義そのもの」ではなく、「仏教の権威や価値を荘厳する表象」を中心に改刻したと考えられる。視認性の高い部分のみを改変していることは、急進派の神兵の暴挙への対抗策とみることでもできる。当時の山伏たちが、塔そのものの破壊を免れるために自らの手で改変を行いつつ、仏教・修験道不滅の祈りを宝篋印塔の造形に託していたことが明らかになった。さらに、英彦山宝篋印塔身の種子の配置について、英彦山における北岳への信仰と、移築をしていない大興善寺宝篋印塔の配置を根拠とし、「南面北座説」をもとに、実際の方角と北方遥拝を重視し、塔身正面に南方の宝生如来(タラク)、向かって右に東方の不空成就如来(ウン)、背面に北方の阿闍



図1《英彦山宝篋印塔 3D データ》

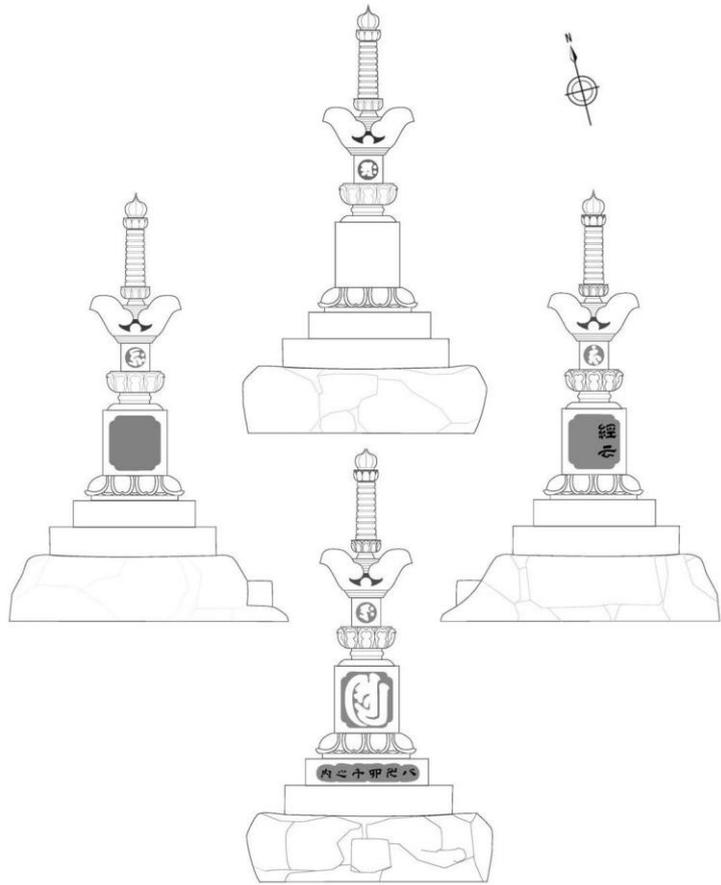


図2 知足美加子《英彦山宝篋印塔復原想定図》



図3 知足美加子《英彦山宝篋印塔復原模型》2018年



図4,5 密岡稜大。知足美加子《英彦山宝篋印塔 AR 復原》2020年



如来(アク)、向かって左に西方の阿弥陀如来(キリーク)が刻まれていた

と推定した。豪潮は、天台密教の宿曜に明るかったことから¹、方位に対する意識は高かったと考えられる。英彦山宝篋印塔も建立から移築をしていないため、塔身の金剛界五仏の種子の配置は、実際の方位を重んじていると考えられる。現状の英彦山の塔(図1)の正面は南を向いているため、背面に北方の阿闍如来(アク)を配置した(図2)。英彦山の北岳、中岳、南岳の三岳うち、最も尊格が高いのは北岳とされている²。この復原の配置だと、尊格の高い北を、南から遥拝する形となる。また廃仏毀釈後、向かって右の東の阿闍如来を円(日光)に、向かって左の西の阿弥陀如来を半月(月光)に改刻したことに対しても整合性があると考えた。3D データによるデジタル技術と彫刻技術を組み合わせ、復原模型を制作した(図3)。この復原模型の3D データをもとに、廃仏毀釈以前の宝篋印塔の姿をAR(仮想現実)によって可視化するアプリケーションを制作した。URL <https://serene-dubinsky-5f0822.netlify.com/> にアクセスし、QRコードを読み取ると、廃仏毀釈前の(改刻部分が青く強調された)宝篋印塔の3D モデルが立ち上がる仕組みとなっている(図4-5)。

1 「日田市・月出山岳の仏塔、天台密教の占星術刻む。高僧・豪潮の影響か」毎日新聞、2016年1月19日地方版
 2 英彦山は中岳山頂の上宮神殿に三峰の神が合祀されており、その中央には「北岳」の祭神である天忍穂耳命が配されている。

(2) 彦山三所権現御正体



図6《彦山三所権現御正体》鎌倉時代《英彦山三所権現座像(部分)》江戸時代
土佐光淳《彦山垂迹曼荼羅(部分)》1759年
知足美加子《英彦山三所権現御正体復原》2016年



図7 知足美加子《彦山三所権現御正体制作風景》2016年

宝篋印塔の他に、明治期に改変された修験道美術として《彦山(鎌倉期の英彦山の表記)三所権現御正体》があげられる。この御正体は、三面³の円形の鑄銅板に神像(坐像)と二重火炎光背を鋳止めした懸仏形式⁴である。仏像ではない神像の御正体は稀である。

彦山三所権現御正体について、意匠の分析から廃仏毀釈の影響と各面の発見場所の違いについて考察を行った。その中で、光背や蓮華、神像が同面に造形された神仏混淆の表象が意図的に省かれたことを明らかにした。明治期に、伊弉諾尊像は光背を排除さ

れ、純粋な神像として英彦山上宮に置かれた。伊邪那美尊像は、蓮華をもった神像と光背が排除され、神鏡として元の英彦山下宮に置かれた。天忍徳耳尊像は保存状態がよいことから、僧形仏像としての破壊を免れるため、深く隠されていたと推測した(図6-7)。

(3) 不動明王立像

不動明王は行者を守り導くものとして、修験道において重要視されてきた。英彦山に残された数少ない不動明王像の中で、破損した光背を直接仏像に縛り付けているものがあつた⁵。

この不動明王立像(鎌倉時代)は、衆生救済の象徴である羂索を持つ左手を伸ばし、体の正中線近くまで下方に突き出しているところが特徴的である。本不動明王の素材は針葉樹であり、おそらく杉だったと考えられる。古来より神聖な霊山である英彦山山内の木々は神仏のものであり、山外に持ち出せばいけないという掟があつた⁶。英彦山は「水分神」として里のものたちに水を与え、里の人々の信仰と寄進を集めてきた。この信仰を支えたのは、水を生み出す山内の樹木、特に杉である。英彦山修験者は修行および山内環境整備の一環として、樹木を植えていた。英彦山8合目付近には「千本杉」といって、

3 天忍徳耳尊像:鏡面径 44.9cm 伊邪那美尊像:鏡面径 43.4cm 伊邪那岐尊像:鏡面径 44.8cm 井形進「美術工芸資料『英彦山総合調査報告書(本文編)』添田町教育委員会 2016年 pp.219-220

4 御正体は懸仏ともいい、円形板に仏像等のレリーフを取付けたものである。上方2カ所に鈎手環をつけ、堂内に懸け礼拝する。

5 針葉樹材 寄木造 彫眼 彩色 鎌倉時代 英彦山神宮所蔵 英彦山修験道館保管 像高 44.6cm 3)前掲書 p.225

6 慶長5年(1600)、徳川家康面前で裁決された英彦山の独立を保障する条文には「当山のこと、先規の旨に任せられ、守護不入、十方檀那とすべきこと」の他「山中の竹木、他方より伐採すべからざること」と記されている。

山伏たちが450年前に植林しゾーニングした地域がある(平成3年の台風により壊滅的被害を受けた)⁷。今回の復原にあたって、英彦山神宮の協力により、倒木した千本杉を提供してもらっている。

廃仏毀釈時、焼却に神兵数十名携わったといい、英彦山には相当数の木彫仏像が存在していたと考えられる。英彦山杉による建築「板倉(安土桃山)⁸」は傾斜のある複雑な仕口で組まれており、山内に木に関する高い技術が存在したことを示している。田邊三郎助は、「靈木化現説」と神仏習合思想の関係を次のように説明している。自然崇拜は神の依り代として巨岩、巨木、水(滝)などを対象としてきた。靈木によって仏像を彫るということは、仏が神(木)を通じて顕現するという思考を生み出し、神仏習合思想へと繋がっていったという。靈木性の強調として、立木仏や鈍彫りの仏像、背面を荒彫りした仏像等が出現したと、田邊は述べている⁹。英彦山には草木を重んじる考え方があり¹⁰、木を山外に持ち出してはいけぬ掟があった。鬼が植林したという伝説が残る「鬼杉(樹齢約1200年)」、修行の一環として植林した「千本杉」「行者杉」の存在は、英彦山修験道における木への崇敬と植林(木材活用)文化を伝えている。千本杉は風雪厳しい環境において少しずつ成長するため、固い木目が細かく連続している。堅牢な英彦山杉は磨くと自然な光沢をもち、復原においては素材を活かし塗装を施さなかった(図8)。



図8《不動明王立像》鎌倉時代
《苗村神社不動明王立像》《長寿寺不動明王立像》
知足美加子《不動明王立像復原》2016年

以上の修験道美術の改変の分析および復原を通して、修験者達が信仰対象を破壊から守るために改変を行った経緯と、背後にある葛藤を読み取ることができた。国家神道に歩み寄るための改変の中には、仏教・修験道不滅への願いが込められていた。仏教を神道以上に荘厳しないよう配慮しつつ、仏教の教義そのものは堅守しようとする、修験者たちの存否をかけた創意工夫を辿ることができた。

観て分析すること以上に、作ることで理解できた英彦山修験者たちの智慧と技術がある。今回の復原のうち、彦山三所権現御正体と不動明王立像は新たな信仰対象として、奉幣殿再建400年護摩焚きの際に公開された。

2017年2月「わが国を代表する山岳信仰の遺跡で、修験・仏教・神道の在り方を考える上で重要」として国指定史跡に登録されている。一度失われた文化を再興することは困難だが、修験道美術に残された先人の偉業を観察・熟考し、ひとつの足掛かりとしていきたい。

7 英彦山には標高で区切られた四土結界(常寂光土、実報壮嚴土、方便浄土、凡聖同居土)があり、千本杉は実報壮嚴土の結界内に存在した。

8 和田一雄「英彦山の建築」『増補英彦山』葦書房 1978年 pp.978-1004

9 田邊三郎助編集『神仏習合と修験』新潮社 1989年 pp.70-82

10 山川草木国土悉皆成仏:『中陰経』にいうといわれてきた偈の一部。草木土石のように非情のものでも、ことごとく成仏できるという意。平安末、院政期ごろ、口伝法門系で偽作された偈と見られる(仏教語大辞典)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 知足美加子	4. 巻 第62号
2. 論文標題 廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術における復元的考察 - 豪潮宝篋印塔、三所権現御正体、不動明王立像 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山岳修験	6. 最初と最後の頁 pp.49-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 知足 美加子	4. 巻 38
2. 論文標題 廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術における復元的考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 第38回日本山岳修験学会資料集	6. 最初と最後の頁 p.34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 知足 美加子	4. 巻 58
2. 論文標題 九州北部豪雨災害における文化と復興	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西部地区自然災害資料センターニュース	6. 最初と最後の頁 pp.32-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 知足 美加子	4. 巻 3
2. 論文標題 アート通じた-再生 -修験の世界観と災害復興	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アートが生まれる場所 アートが紡ぐ時間	6. 最初と最後の頁 pp.122-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomotari Mikako	4. 巻 21
2. 論文標題 A Study of the Buddhist Stone Reliefs of Mt. Hiko and the Influence of Shugendo in the Kyushu Region	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Religion and the Arts	6. 最初と最後の頁 459 ~ 489
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/15685292-02104001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 知足美加子	4. 巻 -
2. 論文標題 廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術の研究および信仰対象としての再現 鑄造製彦山三所権現御正体と木彫不動明王立像 -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術の研究および信仰対象としての再現 鑄造製彦山三所権現御正体と木彫不動明王立像 -	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 知足 美加子
2. 発表標題 「廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術における復元的考察」
3. 学会等名 日本山岳修験道学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ソーシャルアトラボ, 知足美加子他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水曜社	5. 総ページ数 240
3. 書名 ソーシャルアトラボ 地域と社会をひらく	

〔産業財産権〕

〔その他〕

英彦山修験道紹介映像（英語字幕）
<https://www.youtube.com/watch?v=gFRzSBbuR8w>
 廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術における復元的考察
<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~tomotari/MikakoTomotari-Reconstruction.HikosanMountainReligionArt%20.pdf>
 A Study of the Buddhist Stone Reliefs of Mt. Hiko
https://brill.com/abstract/journals/rart/21/4/article-p459_1.xml
 廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術の研究および信仰対象としての再現
<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~tomotari/hikosanj2016.html>
 英彦山宝篋印塔ARアプリケーション《hikosanAR》
<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~tomotari/hikosanAR.pdf>
 【作品】
 知足美加子，彫刻「朝倉龍」国立新美術館（2018）朝倉市率杷木小学校パブリックコレクション
<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~tomotari/asakuradragon.html>
 知足美加子，彫刻「花開童子と福太郎童子（吉木の山桜）」国立新美術館、久留米市美術館（2019）添田町役場 パブリックコレクション
<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~tomotari/yamasakura.html>
 知足美加子、杉岡世邦、池上一則，アートガーデン「黒川庭園と泰庵-英彦山修験道と禅に習う」共星の里 黒川INN美術館（2020）
<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~tomotari/2019kurogawa.garden2.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----